

平岡昭利編著：離島研究．海青社，2003 年，228 p.，2,800 円．

日本には「離島」が少なくない．離島は観光スポットとしても重要で、「離島観光ブーム」ということがいわれた時期もあったが，大いに高まるでもなく，衰えるでもなく，ブームとしてはきわめて息が長く，今もそれが続いているといつてよい．

地理学でも，離島は古くから重要な研究対象とされてきた．そして今もなお屢々，取り上げられているテーマである．これまたいへん息が長いといつてよいであろう．

離島には，それぞれ多様な特色がみられると同時に，年をおってその特色も変化してきている．それに伴って，離島研究における着眼点にも変化がみられる．近年の新しい離島研究の成果を結集した本書の意義は，きわめて大きい．

本書は，日本の離島に関する地理学的研究論文 12 編（12 章）から成る論文集である．

12 の章は，Ⅰ 島の特性と結びつき（第 1～5 章），Ⅱ 農業・牧畜の島々（第 6～8 章），Ⅲ 漁業・養殖の島々（第 9～12 章）の 3 部に分かれる．

第 1 章では須山 聡が，島嶼関連 4 法（離島振興法，小笠原諸島振興開発特別措置法，奄美群島振興開発特別措置法，沖縄振興開発特別措置法）で指定されている 319 の有人島嶼のうち，人口 50 人未満の極小島嶼や架橋された島嶼，軍事・気象関係者のみが住む島嶼などを除いた 259 の島嶼を取り上げ，性別・年齢別人口構成比や産業別就業者率，専業農家・専業漁家の率，対人口観光客数など，16 変数を用いて因子分析を行い，さらにクラスタ分析によって，259 の島嶼を，A 生業的漁業島嶼群，B 自立的漁業島嶼群，C 小規模中心地・製造業立地島嶼群，D 農業特化島嶼群，E 公共事業依存島嶼群，F 観光化島嶼群，G 鉱業特化島嶼群の 7 類型に分け，それぞれについて考察している．各類型に属する島嶼の数は A が 63，B が 62，C が 60，D が 38，E が 16，F が 13，G が 5 である．

第 2 章では石川雄一が，長崎県の対馬，壱岐，宇久小値賀，上五島，下五島にある 23 市・町を，産業別就業者率を基にしたクラスタ分析により，A1

中心地機能，A2 弱い中心地機能・漁業活動，B1 漁業主・農林業従および公共事業，B2 半農半漁活動，C 農業活動，X 漁業活動特化というように分類し，さらに離島居住者の生活行動空間の変化や北部九州主要都市との結び付きについて検討している．

第 3 章以降は個々の島を対象とする事例研究であるが，第 3 章では須山 聡が，奄美大島の名瀬市街における郷友会を手掛かりに，名瀬とシマ（母村）との結び付きを明らかにし，第 4 章では河原典史が，香川県観音寺市の伊吹島について，そこからの漁民の移動（季節的漁業出稼ぎや移住・転業を伴う移動）をライフヒストリーと関連させて考察している．第 5 章では宮内久光が，沖縄県座間味島の観光地化（主としてスキューバダイビング），さらにダイビングサービス業の発展に伴う県外からの移住者について，興味深い実態を明らかにしている．

Ⅱの農業・牧畜の島々として，第 6 章では賀納章雄が，沖縄県渡名喜島・粟国島におけるサトウキビ栽培の復活（1990 年代に入ってから）とその背景について論じ，第 7 章では助重雄久が，同じく沖縄県の伊江島における農業の三本柱，すなわち旧来の肉用牛と葉タバコに加えて，1980 年代に入ってから急激に発展したキクの露地栽培が，どのような新たな展開を見せているかを明らかにする．さらに第 8 章では大呂興平が，隠岐の知夫里島における 1980 年代後半以降の肉用牛繁殖経営の発展について，島内全農家 36 戸での詳しい聞き取り調査により考察している．

Ⅲの漁業・養殖の島々として，第 9 章では田和正孝が，愛媛県越智諸島椋名の延縄漁業について，漁民の漁場利用，漁業者と水域との関係に関する生態学的な観点からの調査結果を述べ，第 10 章では山内昌和が，第二次世界大戦後も人口が減っていない漁業の島，福岡県小呂島を取り上げ，漁業活動の変化と新技術の導入，それに伴う漁業経営体の変遷について論じている．第 11 章では中村周作が，延岡市島浦島のまき網漁業について，漁業活動の時空間的展開を時間地理学の視点から分析し，最後の第 12 章では平岡昭利が，兵庫県家島諸島の三つの浦について，その異なった地域性を明治前期の漁業，特にその階層構造を比較することによって明らかに

している。

以上が、本書各章の概要である。

12の章のうち七つは、地理学関係の学会誌や大学の紀要その他にすでに発表された論文を基に、今回、加筆・修正を加えたものであるが、もとの論文にはなかった5万分の1、2.5万分の1地形図が掲げられ、さらにそれぞれ数枚の写真が掲げられていて、それが理解を助けてくれる。そしてこのような1冊に収められることにより、今後の離島研究者にとって参照しやすいものになっていることは、たいへん喜ばしいことである。

第1章の須山の類型化によると、Fの観光化島嶼群に属する島は総数259島のうちわずか13島で、思いのほか少ない。そしてそれと呼応するかのように、本書の12の章のうち、観光地化という観点から取り上げているのは、第5章の座間味島の1島だけである。

それに対し、漁業または農牧業という、島の旧来の生業を真っ向から踏まえた実証的な研究が、Ⅱ・Ⅲに属する7章のほか、Ⅰの河原のものを含めて8章に及んでいるのは、注目すべきことであろう。入念に作り上げた図や表を用い、オーソドックスに地道な考察を重ねている。

もちろん島の生業にはさまざまな新しい動きがあり、たとえば伊江島での農作業で携帯電話が大いに活用されていることや、知夫里島でのかつての牧畑の遺産を生かした新たな生産システムの展開など、興味深い動向が具体的に述べられている。

一方、1970年代に多かった「過疎」に関連するテーマの研究は、本書にはみられない。高度成長期の挙家難村を伴う激しい人口流出もその後途絶え、問題としては一段落しているからであろう。

なお、第1章での須山の類型化によれば、比較的大きな離島、佐渡島、伊豆大島、奄岐島、対馬島、福江島、種子島、屋久島、奄美大島、宮古島、石垣島などはすべて、Cの小規模中心地・製造業立地島嶼群に含まれている。須山自身が述べているように、人口5,000以上の27島のうち、利尻島以外の26島はこの類型に属している。これらの大規模島嶼では金融・保険業従事者率、卸・小売・飲食業従事者率、製造業従事者率が、他の小規模島嶼群に比べて相対的に高いためにそうなっているのであるが、相互に違った特色のみられるこれら大規模島嶼群を類型化し、比較・対照するには、また別の指標が必要になるということの意味しているであろう。

第4章以降の各章で取り上げられている島は、いずれも人口規模の小さな島であるが、小さな島の農漁村の生活が、大きな島または本土の都市的集落との緊密な結び付きの下で営まれていることは、いみじくも本書第3章で、名瀬市街と奄美大島および奄美諸島の村々との関係について明らかにされている通りであり、これは八重山諸島での石垣市街（四箇）と、他の石垣島の村落および竹富島、小浜島、西表島など他の離島との間にもみられる。

評者は2003年5月に、30年振りに石垣島を訪れ、島内道路の整備と、他の離島との航路の整備に驚いたのであるが、こうした整備が進めば一層、同じ離島といっても、大きな離島と小さな離島との階層的結合が進むであろう。今後そのような面にも研究のメスを加えられればいいのではないかと思う。

本書が、日本の地理学界における離島研究の今後の進展にとって、貴重な一里塚となるであろうことを期待して止まない。

(浮田典良)